



言語

注意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

— 1 —  
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

日露戦争、およびその後のポーツマス講和会議は、当時の国際関係に大きな変化をもたらした。まず、日本という東アジアにおける新興勢力の登場があった。ロシアの膨張を牽制し、朝鮮半島を事実上支配下に置くことによつて、日本も列強の仲間入りを果たしたのである。これ以前の東アジアは、アフリカ大陸同様に、ヨーロッパ列強を中心とした覇権争いの舞台であった。各国は弱肉強食のゼロサム的世界観の下に、自らの勢力圏の確保と拡張を最大の目標とし、これらの地域を帝国主義の渦へと巻き込んだ。そして、東アジアでは、英仏独露の四力国が中心となつてそれぞれ利権拡大を図つていたものの、その一面であるロシアが日本に敗北したことは、従来の枠組みを根底から揺るがすことになつた。つまり、ポーツマス講和会議によつて、日本はロシアの利権に侵食する形で域内における帝国主義のプレイヤーとなり、その結果、ロシアの南進政策は頓挫し、同国の北東アジアにおける影響力は失墜することになつた。

こうした日本の台頭は、国際関係の再編成をもたらしたという意味で、1898年の米西戦争後のアメリカの台頭に酷似している。アメリカの勝利がスペインの没落を決定づけるとともに、スペインと入れ替わる格好でアメリカが新たな列強となつて国際政治の舞台に登場することになつた。加えて、スペインからフィリピンとグアムの領土を割譲されたことによつて、アメリカは初めてアジアにおけるプレゼンスをもつことになつた。これによつて日米関係に本質的な変化がもたらされ、従来の単純な師弟関係からより成熟した戦略的なパートナーシップへと発展させたのである。なぜならば、大国アメリカといえども、当時の海軍力ではフィリピンとグアムを防衛することはほぼ不可能であり——実際、フィリピンは「アメリカのアキレス腱」と称されていた——利益を共有するパートナーとして日本と連携することが最も現実的な策であつたからである。

明治維新以後、アメリカの庇護の下ですくすくと育ち、日清・日露両戦争での勝利によつて頭角を現した日本は、中国とは異なり、域内における安定要因であり、かつ信頼できる国家として見られるようになった。そのため、ローズベルト大統領からすれば、門戸開放政策を尊重しさえすれば、日本も自前の勢力圏を築くことになら問題はなかつた。モンロー主義によつてアメ

リカが中南米を勢力圏としている現状を踏まえれば、東アジアにおいて日本が同様な利権を確保することは理に適っていたのである。こうした考えを反映する形で高平・ルート協定は成立し、日米の絆はより強固なものとなった。

このように、日露戦争後も、国家レベルにおいて日米関係は基本的に良好であり、両国とも双方の国益に配慮しつつ、自らの利権の維持・拡大を企図したのである。にもかかわらず、この時期の日米関係の通説的な理解は、日露戦争を境に根本から変容し、摩擦と衝突の時代の幕が開けたとされている。その根拠として主に挙げられるのが、日比谷焼打事件、両国の新たな安全保障政策(アメリカのオレンジ計画と日本の帝国国防方針)、そしてカリフォルニア州における排日運動である。

これらについて一つずつ検討してみよう。日本での日比谷焼打事件とアメリカでの排日運動の背景には、両国の世論の勃興があった。<sup>5</sup>しかし、前者を単純に反米デモと片づけるのは正しくない。なぜならば、事件の一因として、ポーツマス講和会議でロシアに対して賠償金なき「ソフト・ピース」で満足した日本政府に対する憤り<sup>a</sup>という側面が内包されていたからであった。日露戦争は日本の一方的な勝利であったと政府によつて吹き込まれていた日本の世論は、賠償金のない講和会議の結果に到底納得できなかった。そして、小村寿太郎が最も恐れていたように、大きく期待を裏切られた国民は、その鬱憤<sup>うづげん</sup>を焼打事件という形で晴らしたのである。当然、講和を斡旋したアメリカも抗議の対象であり、大使館などが暴徒の標的となったという報道は多くのアメリカ人を困惑させた。ローズベルト大統領も、恩を仇で返すようなこうした日本人の行為には憤りながらも、それが国家レベルで日米関係を傷を残すとはまったく考えていなかった。他方の日本政府も、責任ある国家としてアメリカに対して謝罪し、適切な弁済も行ったため、両国間の信頼はかえつて

A

次に、ポーツマス講和会議後の日米の互いを意識した国防方針の策定とそれに伴う日米建艦競争は、「組織」という異なった視点から説明することが可能である。太平洋を挟んで日米が互いを仮想敵国として見立てるのは、組織の存在意義を担保しつつ、十分な軍事予算を獲得するためにはきわめて有効な手段であった。相互に戦争計画が策定されたという事実だけをもってただちに日米開戦に直結するものではない。現に、アメリカはいかなる状況に対しても適切に対応できるように、対英戦争をも含む複数の国に対する作戦計画を整えていた。不測の事態に備えるのが軍部として当然の行為であるがゆえに、規定行動<sup>ルーティン</sup>として理解で

きよう。つまり、それは日米関係の現状とは切り離された次元において機能しているのである。<sup>6</sup>

ならば最後に、カリフォルニア州を中心に展開された排日運動はどうであったか。「開戦必至論(war scare)」を惹起し、日米両国の世論を、一時騒がせた移民問題も、この時点では国家レベルで日米関係に致命傷を負わせることはなかつた。移民問題は、人種を理由に日本人学童をサンフランシスコ市内の公立学校から閉め出した1906年のサンフランシスコ学童隔離事件のことであるが、事件自体はローズベルト大統領の敏速な行動によつて、日本政府の満足する形で無事に収拾された。州の権限に大きく干渉したローズベルトの行為は、大局的な観点から何よりも日米関係を重視した結果であり、堅固な日米関係は日露戦争後も維持されたのである。排日運動はその後も再燃したが、その都度、ローズベルト大統領は日米関係を優先して適切に問題を処理した。この基本方針が、次のウイリアム・タフト大統領にも引き継がれたことにより、タフト政権期を通じて移民問題が両国において火種になることはなかつた。

ポーツマス講和会議後の日米関係はきわめて良好な状態で堅持されていたのであるが、むろん、問題がまったくなかつたわけではない。満州に対するアメリカの経済的関心とそれに伴う資本流入は、日本にとつて憂慮すべき状況であり、その政策の原動力となつたタフト大統領のいわゆる「ドル外交」は、日米関係上のケンアン事項となつた。とはいへ、それが戦争の理由となつたことは一度もなく、日米関係を根底から傷つけるような性質のものでもなかつた。換言すると、タフト政権下では、ローズベルト政権時よりも摩擦は多少増えたものの、その底流において日米関係はまだ健全かつ堅固であり、協調の枠組みは維持された。これはタフト大統領の下、1911年に新たな日米通商航海条約が締結されたことからもうかがえよう。

このように、タフト大統領も日本の勢力圏を尊重しており、日本が門戸開放政策を遵守し、フィリピンとハワイに対する領土的野心さえもたなければ、朝鮮半島と台湾を中心とする日本の勢力圏に介入する気は毛頭なかつた。こうして、ポーツマス講和会議から8年経た後も、日米関係はきわめて堅固であつた。もし「旧外交」を基底とするローズベルトの現実主義外交路線がそのまま継続されていたなら、その後もこの状態は維持されていたことであろう。

しかし、1913年にウッドロー・ウィルソン率いる民主党が政権をとつたことにより、アメリカの対日政策は大きく変化

し、日米関係は〔協調の時代〕から〔対立の時代〕<sup>10</sup>へと転換していく。ウィルソン大統領が唱える「新外交」は、既存の国際関係のルールを根底から覆し、「持つ国」と「持たざる国」との差異を固定化させる結果を招いたのである。帝国主義の時代に乗り遅れた日本からすれば、こうしたウィルソンのビジョンは到底共有できるものではなかった。このように、アメリカ外交が日本にとって一定範囲において許容できる「ドル外交」から、耐え難い「モラル外交」へと変遷した時点で、日米関係に歪みが生じ、ローズベルト大統領がとりわけ重視した日本との戦略的パートナーシップの関係を根底から揺るがす結果を招いたのである。

すなわち、その後の歴史を振り返ると、日米関係が毀損した原因の一つに、アメリカの利益だけを主張し、日本の利益にはさして配慮を示さなかったウィルソンの東アジア政策があった。ローズベルトⅡタフト両共和党政権の下では、小さな摩擦は存在しても、それが日米関係の核心部分を傷つけてはならないという配慮は常にあった。ウィルソンにはこうした認識が著しく欠落しており、その結果、日米関係は協調よりも摩擦を基調とする時代に突入することになる。

（養原俊洋『戦争』で読む日米関係100年』による）

〈注〉

\*ポーツマス講和会議Ⅱ一九〇五年に日露戦争の講和のためにポーツマスで開かれた会議。

\*ゼロサム的な世界観Ⅱ複数の国が競う中で、全ての国の利得と損失の総和が常にゼロとなることをめざす考え方。

\*門戸開放政策Ⅱ特定地域における商業上の機会均等などを求める外交政策。

\*モンロー主義Ⅱ一八二三年にアメリカのモンロー大統領が宣言した、新旧大陸間の相互干渉主義。

\*高平・ルート協定Ⅱ一九〇八年に日本とアメリカがこの時点での領土を互いに公式に承認した協定。

\*オレンジ計画Ⅱ日本を仮想敵国とするアメリカ海軍の戦争計画（日本をオレンジ色に色分けした）。

\*小村寿太郎Ⅱポーツマス講和会議の日本全権。当時外務大臣。

\*ドル外交Ⅱ経済力によって海外進出をめざす外交政策（「弾丸に代えてドルを」というタフトのことばによる）。

問一 傍線部1「従来の枠組みを根底から揺るがすことになった」とはどのようなことか。その具体的説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は1。

① ヨーロッパ列強がアジア・アフリカで覇権を争うという帝国主義の枠組みが、今までにない手法をとる帝国主義プレイヤ―日本の参加によって、パートナーシップを重視するものに変化したこと。

② ヨーロッパ列強が利権拡大のために覇権を争うという東アジアの国際関係に、新たにアメリカが参加することになり、その庇護下にあつた日本の地位が向上したこと。

③ ヨーロッパ列強が利権拡大のために競い合うという東アジアの国際関係からロシアが後退し、代わつて域内の日本がこの競争に加わり、その影響力が無視できなくなつたこと。

④ 英仏独露の四方国が中心になつてそれぞれの勢力圏の確保と拡張をめざすという東アジアの国際関係の枠組みが、ロシアの挫折を目的の当たりにして英仏独による協調路線に転換したこと。

⑤ 英仏独露の四方国が覇権を争うという東アジアの国際関係に域内の日本が新たな列強となつて加わつたため、四方国が利権の侵食を恐れ協同してこれに対抗し始めたこと。

問二 傍線部2「アメリカの台頭に酷似している」とあるが、どのような点が酷似していると筆者は見ているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は2。

① 列強の圧力に抵抗して独立を果たし、列強の力の及ばない地域に勢力圏を確立して列強の仲間入りをした点。

② 列強諸国と戦争を繰り返す中で徐々に領土を拡大し、アジアの重要地域を勢力圏とすることに成功した点。

③ 先行する列強の一国に戦争で勝利して得た遠方の領土の防衛のために、急激な海軍力の増強を行った点。

④ 先行する列強に戦争で勝利したとはいえ、軍事力は不十分で、パートナーとの協力によって影響力を強めた点。

⑤ 先行する列強の一国に戦争で勝利して、自らの勢力圏を確保し、その国と入れ替わりに新たな列強となつた点。

問三 傍線部3「これによつて日米關係に本質的な変化がもたらされ」とあるが、筆者は「本質的な変化」をどのようなものと捉えているか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

① アメリカが日本を庇護する国から、アジアにおける自国の領土を防衛するためのパートナーとして扱うようになった変化。

② アメリカが日本を小国と扱うことから、アジアにおいて覇権を争う列強の一つとして日本と敵対するようになった変化。

③ 日本がアメリカの従属国の地位から、強力な軍事力を背景にアメリカの同盟国としての地位を得ることになった変化。

④ 日本がアメリカの庇護国から、日露戦争での勝利によつてアメリカに対等な条約を認めさせるようになった変化。

⑤ 關係のなかつた日本とアメリカが、新興国同士互いに利益を共有するパートナーと見なして急接近したという変化。

問四 傍線部4「理に適っていたのである」とあるが、筆者はなぜこのように判断しているのか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

① アメリカの膨張主義への批判をかわすために、日本を支持することが重要であつたと見られるから。

② 日本・アメリカそれぞれの特殊事情を認めることが、アメリカの平等主義から当然のことであつたから。

③ 東アジアにおける日本の利権の追求は、アメリカの利害と全く無関係なものと考えられるから。

④ 日本による勢力圏の確保・拡張は、アメリカのそれと原理的に同じものと見られるから。

⑤ 英独仏露による理不尽な日本の利権の侵食は、アメリカにとつても不都合であつたと考えられるから。

問五 傍線部5「しかし、前者を単純に反米デモと片づけるのは正しくない」と筆者が考える理由は何か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は5。

① 日比谷焼打事件の本当の標的はアメリカではなく、その背後でアメリカを巧みに利用して講和を有利に導こうとした英仏独露の列強であったから。

② 日比谷焼打事件は、日本政府が外交の失敗を隠すために、講和を斡旋したアメリカに国民の不満の矛先が向くように仕向けたものであったから。

③ 日比谷焼打事件は、日露戦争で勝利したはずなのに賠償金がないことへの日本国民の不満が、講和を斡旋したアメリカにも向けられたものであるから。

④ 日比谷焼打事件は、偶発的な反米デモではなく、開国以来蓄積されてきたアメリカとの不平等な関係への日本国民の不満が爆発したものであったから。

⑤ 日比谷焼打事件は多くの損害を出した日本政府に対する国民の憤りが本当の原因であり、何の関係もないアメリカは巻き込まれたに過ぎないから。

問六

空欄

A

を埋めるのに最適なことを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は6。

① 増した

② 揺らいだ

③ 重なった

④ 現状を維持した

⑤ ほころび始めた



問七 傍線部6「それは日米関係の現状とは切り離された次元において機能しているのである」とあるが、わかりやすく説明する  
とどのようなことか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は7。

① 実際の日本の政府レベルの良好な関係を全く知ることなく、それぞれの国民の世論が相手国に対する戦争の準備を熱狂的に支持していたということ。

② 日米関係が国家レベルで実際にどのような関係にあるかにかかわらず、両国の軍部はその存在意義を示すために戦争の準備を進めるものであるということ。

③ 帝国主義時代の日本とアメリカは、政府と強力な軍部がそれぞれ独自に外交方針を策定しており、両者の意見が矛盾するのは当然であるということ。

④ 日米関係の国家レベルでの現状とは無関係に、経済的な利害関係の対立によって、両国の間で「組織」防衛の原理が強力に働いていたということ。

⑤ 実際に日米関係が良好であっても、勢力圏を拡大し続ける両国が互いを牽制するために軍事力を誇示し合うのが、この時期の国家の普通のあり方であるということ。

問八 傍線部7「この時点では国家レベルで日米関係に致命傷を負わせることはなかった」と筆者が考える理由は何か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は8。

① 日本政府には移民問題の情報が十分に伝えられておらず、これを小さな問題と捉えていたから。

② ローズベルトが世論よりも日米関係を優先して日本が納得できる形で事態を收拾したから。

③ 移民問題は日米両国の世論にとっては一過的なものであり、間もなく忘れ去られたから。

④ ローズベルトが日本政府からの助力を得ながら日米両国民が満足する形で問題を処理したから。

⑤ 排日運動がカリフォルニア州に限定された、全米的な広がりを見せるものでなかったから。

問九 傍線部8「とはいえ、それが戦争の理由となったことは一度もなく、日米関係を根底から傷つけるような性質のものでなかつた」と筆者が考える理由は何か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は9。

① 「ドル外交」はアメリカの利権を強く主張するものであつたが、タフトは日米の信頼関係に基づいて満州での摩擦は存在しないと考えていたから。

② 「ドル外交」は日米双方にとって戦争の理由にできるほどの意味を持たない地域的問題に過ぎず、両国の世論も関心を払わなかつたから。

③ この時点で日本は満州での覇権を確立していなかつた上に、アメリカの満州に対する経済的関心も一時的なものを受け止められたから。

④ 「ドル外交」は日米両国にとって未解決の問題となつたが、それは経済レベルに止まり、日米の政治的関係に及ぶものではなかつたから。

⑤ 「ドル外交」は日本にとって憂慮すべきものであつたが、そもそもタフトは日本の勢力圏に介入する考えを持っていなかったから。

問十 傍線部9「ロースベルトの現実主義外交路線」における対日姿勢を具体的に示した箇所を、これより後の文章から四十字以内(句読点を含む)で抜き出し、その最初の五字を記せ。解答用紙(その1)を使用。

問十一 傍線部10「対立の時代」とあるが、筆者の考える「対立の時代」の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は10。

- ① アメリカと日本が対等に競争する時代
- ② アメリカと日本が朝鮮半島・台湾で競合する時代
- ③ 日米の世論が激しくぶつかり合う時代
- ④ アメリカが自国の利益だけを主張する時代
- ⑤ アメリカが日本を仮想敵に見立てる時代

問十二 この文章の趣旨に合致するものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は11。

- ① 日米関係は日露戦争を境に対立関係に転ずるとする通説とは異なり、実際には日露戦争後も国家レベルでは健全で堅固な関係が保たれていた。
- ② 日米関係は日露戦争をきっかけに対立の火種が生まれ、一時的には表面的に良好な状態を保ったかに見えたものの、「新外交」によって決定的な対立関係に至った。
- ③ 通説では日露戦争を境に日米関係は悪化するとされているが、摩擦と衝突は既に日清戦争の時から始まっており、日露戦争はそれを明確に方向づけたに過ぎない。
- ④ 日米の世論は日露戦争を契機に決定的に悪化し、両国政府の努力にかかわらずこれを鎮静化できず、ついに国家レベルでも衝突するに至った。
- ⑤ 日露戦争後、日米間の戦争の火種が生じたが、ローズベルトとタフトが適切な対策を講じなかったため、戦争が避けられなくなった。

問十三 二重傍線部 a「憤」の読みを平仮名で記し、b「ケンアン」を漢字に直せ。解答用紙(その1)を使用。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え よ 。

芸術がこの地球上でことのほか存在を認められ、大事にされ、敬意を払われているのはどこだろうか。新しいことが一番大事で、証明できないことは存在を認められないという科学の国でもあるドイツなのだ。誰でも知るように、自動車産業の分野で世界でもっとも成功しているこの国は、クラシック音楽のもっとも重要な故郷のひとつであると同時に、もっとも気前がよいスポンサーなのである。この国の自動車産業は、世界中で競争に勝って得た儲けを、音楽のために惜しげもなく寄付しているという言い方では足りないほどだ。オペラでもコンサートでも、主要な催しのプログラムを開いてみて、自動車会社のマークが入っていないことのほうが珍しい。そういえば、かつてドレスデンが大水害に見舞われたとき、フォルクスワーゲンは自社の工場を、オペラ上演のための空間として提供したのだった。

A、企業からすれば宣伝効果は計り知れないものがあるが、劇場と工場というもっとも正反対に見えるものが手を握り合うという事実には、西欧の文明の根幹を考えさせるものがある。

この国においても、経済不況だのを理由として、政府や自治体による公的支援は縮小している。オーケストラや劇場を減らすという動きも続いている。だが、そうは言っても、音楽やそれ以外の芸術が、まともな人間生活のためには不可欠であり、公的助成や企業の寄付が絶対必要だという基本的な認識は揺るがない。個々の上演における質の高い低いについてはいろいろな考え方ができようが、街の中心部では毎晩のように劇場やホールの灯が点り、楽しそうに歓談する人々が見受けられるという光景は、やはり裕福な文明を持つ国だと思っしかないのではないか。贅沢や裕福は、イタリアではごく一握りの人々のものである。だから、それはいかにも高価な衣服やエキセントリックなスポーツカーという形で誇示されがちである。

B、ドイツでは富はより広く薄くばらまかれている。だから、さりげない贅沢や裕福がイタリアより広い層で見受けられる。劇場や演奏会の予定表を見れば違いは歴然としている。たとえミラノやローマでも、催しものの数はさして多くなく、毎晩オペラハウスが開いているわけではない。来られる人間の数が全然違うのだ。振り返れば、東京にも劇場の数は数えられないほどある。音楽的な催しも同様だ。決して文化的な活動が盛んでないわけではない。なのに、豊かさの雰囲気がいわめて希薄なのはどうしてなのか。

もちろん、ドイツの人々が服装を整え、劇場へ出かけ、休憩時間にはワインの杯を傾けるといふ華やかな夜を楽しむためには、日常において華やかな **C** 生活があるには違いない。そうしたことは、トーマス・マンあたりの小説を開いてみれば、うんざりするほど執拗しつとに書かれている。優雅な一晚のために、<sup>3</sup> どれほどの心理的な重圧感があり、競争があり、敗北者がいるか。それに、なるほど音楽や芸術は大事にされているが、だからといって芸術が無条件にスウハイ、歓迎されているわけでもない。親が子供に望むのはやはり医者や弁護士や銀行員になることで、食べるかどうかもわからない芸術家などにはなつてほしくない。

明らかなのは、ドイツにおいては、<sup>4</sup> 豊かさのイメージがきわめてはつきりしているということだ。日本においても、かつてはそうだったろう。何か特別な趣味がある人間はそれにこだわればよいが、そうでない人間は、もし金持ちならどうすればよいか。その振る舞い方の規範が昨今の日本では崩壊してしまつたように見える。成金はいつの時代にもいたが、その成金は、すでに裕福な人々のまねをするのがかつては普通だった。遡さかのぼれば、裕福な人間は王侯貴族を模倣するのが **D** だった。金持ちは、金を持つているからと言って自由なわけではない。富裕な人間はこうであるべきという厳格な模範があり、それに従うことが体面を保つことでもあった。その模範は、実に細々とした細部にわたつてはいるはずだ。<sup>\*</sup> ピーター・ゲイの『快樂戦争』にはそのデテールが詳述されているし、たとえばいまだによく読まれているジェローム・デービッド・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』にしても、そのような社会的な枠の中で展開する物語なのである。このサリンジャーの作品が、一般的には青春小説として読まれてしまうのは仕方ないと思うが、その実これは **E** 小説であつて、そこが読み飛ばされてしまふのは、読者の大半が若いからといって、いかななものか。ただ、そこを詳しく解き明かしてみたとこで、クラスレス感覚の行き渡つた日本の若者たちは白けるばかりとは思ふけれど、<sup>5</sup> 今や、日本の成金には、規範となるべき行動指針があまりない。社会があまりにもまっ平らになると、<sup>6</sup> こうなる。貧しい者が金持ちに憧れ、金持ちが貴族に憧れ……そういうベクトルがない。それがよいか悪いかは別として、である。

(許光俊『最高に贅沢なクラシック』より)

〔注〕

\*トーマス・マンⅡ(一八七五—一九五五)ドイツの小説家。

\*ピーター・ゲイⅡ(一九二三—)ドイツ生まれの米国在住歴史学者。『快樂戦争—ブルジョアジーの経験』(一九九八)は、英  
国ヴィクトリア時代(一八三七—一九〇二)に産業資本家を中心とする新興ブルジョアジーが王侯貴族と対抗しながらも勢  
力を拡大し、特に芸術面での洗練と変貌を遂げる姿を描いた文化史学の著書。

\*ジェローム・デービッド・サリンジャーⅡ(一九一九—二〇一〇)米国の小説家。『ライ麦畑でつかまえて』(一九五二)は、  
社会への反発を高校生の一人名で語って名声を得た小説。

問一

空欄

A

に入る最適な語を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12。

- ① むしろ                      ② ところが                      ③ そこで                      ④ むろん                      ⑤ かならずしも

問二

傍線部1「劇場と工場というもつとも正反対に見えるもの」とあるが、どのような点において「正反対に見える」のか。その  
説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13。

- ① 劇場は美しく楽しい場であるのに対し、工場は汚くて騒々しい場所であるという点。  
② 劇場が優雅に芸術を楽しむ場であるのに対し、工場は利益のために戦う場であるという点。  
③ 劇場はお金を払って入場する場所であるのに対して、工場はお金を稼ぐ場所であるという点。  
④ 劇場がお金に余裕のある人が行く場所であるのに対して、工場は労働者が働く場所であるという点。  
⑤ 劇場は服を整え、おしゃれをして出かける場所であるのに対し、工場は汚れた作業着で働く場所であるという点。

問三

傍線部2「エキセントリック」とあるが、どのような意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号  
をマークせよ。解答欄番号は 14。

- ① 高級                      ② 奇抜                      ③ 有名                      ④ 優雅                      ⑤ 重厚

問四 空欄 B に入る語を平仮名一字で記せ。解答用紙(その1)を使用。

問五 空欄 C には、どのような文字が入るか。「華やか」の否定表現になるように、平仮名三字を記せ。解答用紙(その1)を使用。

問六 傍線部3「優雅な一晚のために、どれほどの心理的な重圧感があり、競争があり、敗北者がいるか」とあるが、どのような意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は15。

- ① 例えば、一晚のコンサートをを行うために、演奏家は心理的な重圧感と闘い、苦労を重ねているということ。
- ② 人々は、劇場で優雅に芸術を楽しむ日がある一方で、日頃は様々な苦労や競争の中で生きているということ。
- ③ 人々が劇場で楽しい時を過ごすためには、経済的な余裕が必要なので、そのことが精神的負担になるということ。
- ④ 社交場でもある劇場では、社会的な地位や財力の違いが際立ち、競争心や敗北感を味わうことがあるということ。
- ⑤ 優雅に芸術を楽しむ人々がいる一方で、多くの人々が貧富の差を感じながら苦しい思いで生きているということ。

問七 波線部「スウハイ」を漢字で記せ。解答用紙(その1)を使用。

問八 傍線部4「豊かさのイメージがきわめてはつきりしている」とあるが、どのような「イメージ」か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は16。

- ① 衣食住に贅を尽くすような生活のイメージ。
- ② 経済活動と芸術活動がともに盛んであるようなイメージ。
- ③ 高価な衣服を身につけ、スポーツカーを乗り回しているというイメージ。
- ④ 生活の中で、音楽やその他の芸術を享受することができるというイメージ。
- ⑤ 医者や弁護士や銀行員のように、経済的に安定して暮らしているというイメージ。

問九 空欄 D には、どのような語句が入るか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号

は 17。

- ① 思考方法      ② 習慣形成      ③ 伝統継承      ④ 教育方針      ⑤ 行動原理

問十 空欄 E には、どのような語句が入るか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号

は 18。

- ① 貴族      ② 心理      ③ 階級      ④ 大衆      ⑤ 規範

問十一 傍線部 5「今や、日本の成金には、規範となるべき行動指針があまりない」とあるが、筆者はなぜそのように言うのか。

その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 19。

- ① 人々の価値観の変化によって、規範や行動指針を求める意識が薄れ、特に成金においてその傾向が強いから。  
② 階級のない現在の日本では、成金がその行動規範とするべき裕福な人々や王侯貴族に当たる存在が少ないから。  
③ 日本の成金は、その財力で多くの事が自力で自由に行けるので、規範とするべき行動指針を必要としないから。  
④ 平等意識が行き渡っている日本においては、成金も財力があるからといって勝手気ままなことはできないから。  
⑤ 現在の日本においては、伝統的な規範や行動指針に対する否定的な意識が高まり、それらが失われつつあるから。

問十二 傍線部 6「社会があまりにもまっ平らになるとあるが、「社会がまっ平ら」であることを他の語で言い換えるとは何か。

本文から五字以内の語を抜き出して記せ。解答用紙(その1)を使用。

問十三 本文の内容と合致しないものを次の①～⑤から一つ選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 20。

- ① イタリアでは、クラシック音楽を楽しむことが広い階層にまで行き渡っている。  
② 劇場に出かけてクラシック音楽を楽しんだりすることは、生活の中の贅沢である。  
③ ドイツでは、さほど裕福でない人たちも劇やクラシック音楽を楽しむことができる。  
④ 東京は文化的な催しも少なくないが、人々が芸術を楽しむ豊かさがあまり感じられない。  
⑤ 西洋文明の根幹は、芸術を人間生活にとって不可欠な存在と認め敬意を払うことである。

















